

## 【優秀賞】

### たかが爪、されど爪

～足の爪の重要性を知ろう！私たちがサポートします！～

湯河原〈ゆうゆうの里〉 診療所

○齊藤美樹 久能木陽子

#### 【目的】

足の爪のケアを日頃から心掛けている人は少なく、実際入院をきっかけに清潔行為を行うと水虫、爪白癬、巻き爪、爪の肥厚といったトラブルを抱えている方が多く、十分なケアを行えていないのが現状であった。たかが爪と思われがちだが、これまでの研究などで足の爪の状態により転倒や歩行障害を予防できると言われてきた。そこで入居者に足の爪の重要性を知ってもらい、爪切りのサポートやセルフケアのアドバイスを行うことで足の爪への意識向上に繋げ、転倒や歩行障害の予防になればと思い取り組むことにした。

#### 【方法】

取組期間：2022年4～10月

仮説：足の爪のケアについての認識不足や爪切りが大変と感じ十分なケアが行えていない。

サポートすることで爪の重要性を認識し転倒や歩行障害の予防に繋がるのではないかと。

- ①外来受診者を対象にアンケート調査を実施し現状把握
- ②爪の重要性、セルフケアのポイントをパンフレットにし配布
- ③爪切りの実施
- ⑤取り組み後どのような意識変化があったのか聞き取り調査

倫理的配慮：アンケートと聞き取り調査は個人が特定されないよう配慮している。

#### 【結果】

アンケートで爪切りを大変と感じている人は66.6%いるがそれでも自分で切っている人が多かった。また診療所で爪切りのサポートをしていることを知っている人は16.6%しかおらず、爪切りをすると「こんなことまでしてくれるなんてありがたい。」「目が見づらくなって苦勞してたから助かったよ。」との言葉が聞かれた。足の爪の状態により転倒や歩行障害の予防になることの認知度は33.4%と低かった。足の爪の手入れをしている人は半数いたがほとんどの人がトラブルを抱えていた。パンフレットを作成したことで爪の重要性や自分の爪の状態を把握し手入れの見直しに繋がった。また爪への関心が高まり問い合わせが多くなった。

#### 【考察】

仮説の通り年齢を重ねるごとに爪切りを大変と感じ足のケアも十分にできない状態であった。しかし、それをどこに相談していいのかわからず困っていたが、取り組みを通し診療所でサポートしていることがわかり解決の糸口が見つかり第一歩が踏み出せたと考えられる。

#### 【結論】

トラブルを抱えた爪はすぐに治るものではなく長い月日をかけて治療・ケアが必要となる。そうならないためにも日頃から爪のケアを心掛け、早期対応をすることが重要である。今回、爪への関心は高まったが転倒や歩行障害の予防とまでは至っていないため引き続きサポートしていきたい。

## 【優秀賞】

### 看取りケアに際して

～現場の介護職員ができること～

佐倉〈ゆうゆうの里〉 ケアサービス課

○新田歩惟 岡野裕子 安納れの 藤田めぐみ

#### 【はじめに】

これまで佐倉施設では多くの入居者を看取り、また看取りに関する様々な研究や取り組みを行ってきた。医療面では診療所を中心に充実した対応がなされてきた。介護もそれに準じて行ってきたが、その時に対応する職員の個人の力量に頼る部分もあり、「看取りの際はこういう対応をする」といったスタンダードが十分定着している状態ではなかった。

#### 【目的】

2022年4月、ケアセンター内で4人の看取りケアが重なる状況になった。一度にこれほどまでの看取りを行ったことはなく、現場がやや混乱した。そこで、今までの解決の意味も兼ね、看取りケアがスムーズに実施できるように取り組みを行った。

#### 【方法】

・課題を解決する方法として①中心となって看取りケアを行うチームの結成、と、②対象者専用の看取りケアハンドブックを作成する、という方策を導き出した。

・6月3日、看取りケアの対象となったAさんのケースについて、看取りケアチームを結成し、取り組みを開始。具体的なケア方法を整理し、情報を現場職員と共有、実際の看取りケアを実施した。同時に看取りケアに関する職員の意識啓蒙や教育も行うこととした。

・5月今後の看取りケアをよりよいものにしていくために、看取りケアについて、職員の年代別にアンケートを実施。

・6月アンケートの集計を行い、今後の改善点に繋げた。

計画作成担当者から情報収集、家族からの聞き取り、PEAP3日本版を基準としてAさんの看取りケアハンドブックを作成しスタッフと共有、家族のグリーフケアを目的として職員による日誌を記録。

・8月看取りケアハンドブックに基づくケアが実施できたかどうか職員にアンケート調査を実施。

倫理的配慮：対象となったAさんの家族に個人が特定されない旨を説明し、文書にて同意を得ている。

#### 【結果】

主体的に動くチームを結成したことで大きく2つの成果があった。ひとつは、Aさんに合わせた詳細な介護内容を記したハンドブックを作成したことにより、チームだけの取り組みではなく、複数の職員が関わり、職員が統一したケアを行えるようになったこと。もうひとつは、職員日誌を作成し、家族に見てもらい、「皆さんによくしていただいたのですね。本当にありがとうございます」と介護内容の理解と、感謝の言葉をいただけたこと（グリーフケアにも繋がった）。

#### 【考察】

専門のチームを編成したこと。チーム中心にケアのスタンダードを「見える化」することによって、上記のような成果が出せることがわかった。

#### 【結論】

看取りケアについて、何をしたら良いのか不安に感じている職員もいたが、具体的でわかりやすいハンドブックを作成したことで、細かな部分まで統一したケアを行うことができた。コロナ禍、面会に来られず、家族の不安もあったと思うが、日誌を通じて看取りケアの様子を伝えることができ、グリーフケアの一助となったと考えられる。

## 【優秀賞】

# 認知症勉強会

～入居者と一緒に学んで行く～

湯河原〈ゆうゆうの里〉 生活サービス課コミュニティ

○宇留野勝彦 石橋巖雄

### 【目的】

入居者から施設内で認知症の方が見受けられ、自分自身もいつ認知症になるか分からない。今のうちに認知症について知識を深めたいという要望と、職員だけでなく入居者も認知症を知りたいという意向を受け、1年間をかけ「勉強会」を開き、入居者と一緒に学んでいくこととした。今回は、その1年間の報告と勉強会後に取り組みの報告となる。

### 【方法】

1. 2021年3月～2022年2月、午前、午後計24回の認知症勉強会を実施
2. NHK福祉ビデオライブラリーより認知症に関するDVDをレンタル視聴後アンケート実施
3. 脳活性化運動の実施
4. 最終回は、認知症について自由討論会を行いアンケートにて理解度と勉強会に対する満足度をはかる。

倫理的配慮：収集したデータ、アンケートは個人が特定できないよう配慮した。

### 【結果】

勉強会はDVDを視聴後、認知症の予防として「脳活性化体操」を行う。月一回、午前、午後と計24回行い、77名の参加となる。勉強会最終回には、2回目から11回目までのアンケート214枚の感想に書かれた質問を「認知症になった時の介護」「認知症と思われる方への対応」「自分自身が認知症になっているのではないか」「職員の対応」の4項目に分類、項目ごとに施設の対応の説明を行う。その後認知症について自由討論を行った。最終回後のアンケートで認知症に対する理解度と、勉強会に対する満足度をはかった。

### 【考察】

アンケートによるDVDに対しての感想は、9割の方が参考になったと答えた。最終回後のアンケートでは、「その人に合った援助をしてくださるので安心しました。」「お話には思い当たる節もところどころあり気を付けたい。」「職員には何はともあれ相談する。」「里に暮らして安心感があることに感謝する。」などの、認知症に対する理解が深まったことなどの意見が聞かれた反面、「認知症の進行を遅らせる対策など具体的なことが聞けなかった。」という意見も聞かれ、認知症予防に対する期待が伺えた。

### 【結論】

今認知症への理解を深めたと同時に、もしもの時の施設の対応が参加者へ浸透し安心してもらうことができた。そして認知症予防への対策として、2022年9月より、みんなで楽しくコグニサイズを開始した。それと同時に、コミュニティが企画する様々な行事を通じて皆様の生活の活性化をはかっていく。

## 【優秀賞】

# 大阪〈ゆうゆうの里〉食事総選挙

～入居者が選ぶ、No.1 メニューとは？～

大阪〈ゆうゆうの里〉

食事サービス課 ○宅見真弓 丹羽悠佳子

生活サービス課コミュニティ 門田拓也 萩原ひとみ

## 【目的】

食堂の喫食数を増やすため、生活サービス課と共同で新しいイベントを企画した。入居者と職員に好きなメニューを選んで投票してもらい、さらに1位に選ばれたメニューを実際に食堂で提供する「食事総選挙」なら、皆に楽しみながら参加でき食数アップにもつながるのではないだろうかと考えた。

## 【方法】

(1) 入居者と職員が投票を行う食事総選挙を4回実施した。

「カレー総選挙」投票期間：5月1日～5日 献立実施日：6月7日

「うどん総選挙」投票期間：6月24日～30日 献立実施日：7月19日

「オムライス総選挙」投票期間：8月27日～9月3日 献立実施日：9月23日

「B級グルメ総選挙」投票期間：10月1日 献立実施日：10月30日

(2) 投票方法

コミュニティが作成したポスターを投票日の1週間前に提示し予告を行った。

3階エレベーターホールに投票場を設置し、選んだ料理にシールを貼って投票する方法を採用した。

(3) 投票で1番になったメニューを献立に反映し、献立提供日は結果発表とともにポスターにて掲示した。

倫理的配慮：倫理的配慮に関して、本研究は個人情報等を含まない。

## 【結果】

・カレー総選挙	総投票数 69 票	1 位	ビーフカレー	43 票	喫食数 105 食
・うどん総選挙	総投票数 53 票	1 位	稲庭うどん	24 票	喫食数 94 食
・オムライス総選挙	総投票数 45 票	1 位	デミグラスソース	24 票	喫食数 91 食
・B級グルメ総選挙	総投票数 68 票	1 位	富士宮やきそば	27 票	喫食数 88 食

## 【考察】

食事総選挙は入居者に楽しんで参加してもらうことができた。食事総選挙で選ばれたメニューは昼食の平均数 80 食をすべて上回る食数となった。また選ばれないであろうと予想していたメニューが総選挙で選ばれるという驚きもあった。今回の取り組みを通して、入居者自身が献立の選定に参加でき、普段食事を予約しない方も食堂に足を運ぶきっかけになり、次回の企画を楽しみにする声もあった。

## 【結論】

今回の企画では大幅な食数アップにつながらなかった。一方で、食堂の献立に興味をもってもらうきっかけとなった。入居者との会話も増え、コミュニケーションツールの一つとなった。今回コミュニティと協力したことで、幅広く入居者に企画の宣伝・予告をすることができた。今回の企画を通して入居者の食事の楽しみを作ることができたと考え、今後はこれを継続し、里の推しメニューを作っていきたい。

## 【会場賞】

# 今でしょ！住み替えハッピー大作戦！

～適切なタイミングでの住み替え提案を目指した取り組み～

京都〈ゆうゆうの里〉 ケアサービス課 計画作成担当者

○中川リノ 木村真知子 上田佐智子

## 【目的】

計画作成担当者が考える住み替えの捉え方やタイミングと、入居者の考えに差があると感じた。アセスメントを行い意向を聞く中でも、ニーズとあった環境となっているかを考えることは計画作成担当者の大切な役割であり、高齢期の生活を支える重要な要素と考えた。住み替えの提案を適切なタイミングでできるようになりたいと考え「候補者が増えると適切な場所やタイミングにマッチする人が増え、提案しやすくなる」と仮説を立てて取り組むこととした。

## 【方法】

- ①待機者管理：空室発生の統計根拠をもとに、住み替え待機者の目標を7名と定め、10日に1度の旬間報告や、住み替え管理表を使い管理を行う。
  - ②入居者への動機づけ：「介護居室があるから安心」のリアル化。心の準備・引っ越しの準備・親族の合意が速やかに行えるよう日頃より働きかけを行う。
  - ③職員の意識統一：リロケーションダメージの軽減・より暮らしやすい環境へということ意識し、打ち合わせの時間を作り進捗状況の把握や意識交換を行う。
- 倫理的配慮：事例では匿名での紹介とし、個人が特定されないように配慮した。

## 【結果】

候補者が多いほど、適切な場所・タイミングでの提案は行いやすかった。2020年4月～2022年11月までで、45室48人の住み替えを行った。

## 【考察】

本人の心情や決意と、住み替えスケジュールのギャップを埋めていくには、候補者が適当数いると、より適切な方に提案できると感じた。多くの方が「できれば行きたくない」「この部屋で頑張れる」との思いを持っていた。その気持ちに寄り添うことはとても大切で、継続的なケアマネジメントの重要性を痛感した。自立を阻害している要因を整理・見立て・考察する作業をチームで繰り返すことで自信をもって提案できるようになったと考える。

## 【結論】

候補者が適当数いるとよりハッピーな住み替えにつながった。そして、身体の状態のタイミングと心の準備をしていくタイミング、どちらも重要だとわかった。同時に課題もみえてきた。今年の2～3月で8人逝去され、候補者全員住み替えても間に合わない状況となり、その後の住み替えが滞ってしまった。試みは続けていき、新たな取り組みも開始しているので、PDCAサイクルをまわしながら発展させていきたい。